

『千夜一夜』の語りのストラテジー
——単独にして多重の声——

青柳 悦子

(筑波大学 人文社会科学研究科)

『千夜一夜』は、既存のさまざまな物語を集め、つなぎ合わせたテキストである。したがって物語のモチーフなどには『千夜一夜』独自と呼べるものはおそらく存在しない。だが『千夜一夜』が、中世アラブ世界で、17世紀以降の西欧で、また現在世界中で、他に代えがたい文学遺産として愛され、重要視されているのも故なきことではなく、そこには『千夜一夜』ならではの特性が大きく関与しているであろう。

『千夜一夜』のテキストを『千夜一夜』たらしめているものとして挙げられるのは、シャハラザードが延命のために王の前で物語を語り続けるという設定であり、またその帰結としてテキスト上にあらわれる夜ごとの区切りや、シャハラザードの語りのなかで物語どうしがつなぎあわされるという構成も挙げることができよう。

作品冒頭の紹介によればシャハラザードは、自分が創作した物語を語るのではなく、万卷の書物で物語を読み知ったとされている。夜の切れ目ごとに繰り返されるのは、「このように聞き及んでおります」「このように伝えられております」というシャハラザードの台詞であり、これらの言葉は彼女が伝聞によって物語っていることを強調する役割を果たしている。すなわち『千夜一夜』の語りとは、誰か（たとえばシャハラザード）が物語るといふありさまを浮上させながら、同時に、ほかの人々の語りの声を背後に（あるいは前面に）響かせる、多層的な語りを特色とする。

本発表では、一般に稚拙ないしは混乱と解釈されがちな、『千夜一夜』のテキストにみられる語りの体制の暗黙の変化（三人称の語りと一人称の語りの交替、語り手の移行など）に着目し、そこから生まれる多重的で揺動的な語りのありさまを分析する。また、こうした語りの特色を一層強調する場として、夜の切れ目が機能していることを分析する。

言語学者ローマン・ヤーコブソンは、発話の時点を中心として過去—現在—未来を線的な一本の矢のようにイメージし、出来事をその線の上にならば「客観的」に位置づけて語る「絶対時制」の語り方（英仏語などのあり方）と、それとは異なる「相対時制」による語り方を明示した。「タクシス」とも呼ばれるこの「相対時制」による語り方は、語りの基準点を、すでに語った内容の時点へとそのつどずらし、出来事どうしの相対的な関連によって新たな出来事を位置づける語り方である。このタクシス的な語り方は、語る主体というものを唯一絶対のものと措定するよりも、複数の語る主体を共起させる傾向を有する。

語り手を明示しつつ同時に多重的な語りの声を想起させる『千夜一夜』の語りのストラテジーを本発表では理論的にこのタクシス的な語りの観点からも考察し、さらに、世界の文学における“一元的で合理的”ではない物語り方の重要性の指摘へとつなげたい。